



リステラス星圏史略  
古資料ファイル 5-2-1-X  
(ありえる・たうん 没原稿)

(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉



# 目次

【 移転 の お知らせ 】	1
（設定）	
☆ あるはずのないまち ☆ （時期不明／もしかして一番最初のメモ。）	5
『ありえる・たうん』（シリーズ）（2006年）	8
（??? 図）（時期不明）	10
（草稿・没原稿）	
（いつものように学校へ出かけたはずの清が）（@派遣先の裏紙／JT 長岡 分岐～RT 長岡 w）	13
「それじゃ、お願いね！」（時期不詳）	15
（濃い色のくせ毛が布団からはみだしている。）（たぶん専門学校）	17
（この話を書いたのは、正確には）（1991.03.06.(水)～03.10(日)）	19
『ありえる・たうん（没原稿）』（@1996.08.24.）	24
『ありえる・たうん（没原稿・2）』（@1996.08.24.）	28
『ありえる・たうん（家政婦のくだり）』（@1996.08.29.）	29
『☆ ありえる・たうん 第二話 ☆（没原稿・1）』（@1996.08.）	30
『☆ ありえる・たうん 第二話 ☆（没原稿・2）』（@1996.08.）	35
『☆ ありえる・たうん 第二話 ☆（没原稿・3）』（@1996.08.）	43
『ありえる・たうん 3（没原稿）』（@1996.08.頃）	59
『ありえる・たうん 3（没原稿）その2』（@1996.08.頃）	62
（借景資料集）	
奥付	
奥付	69



## 【 移転 の お知らせ 】

- ☆
- ☆ 超～大幅に！ 加筆&改稿した2023年版、
- ☆
- ☆ こちらに移転しました。
- ☆
- ☆
- ☆ 『善野物語』
- ☆
- ☆ ... おおの・ものがたり...
- ☆
- ☆
- ☆ <https://novelpia.jp/novel/3718>
- ☆
- ☆

=====

(発掘整理一旦完了)

=====



(設定)



☆ あるはずのないまち ☆ (時期不明／もしかして一番最初のメモ。)

<http://85358.diarynote.jp/201609221810142304/>

2016年9月22日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

はざまの森へ

はざまの杜へ

☆ あるはずのないまち ☆

1. 町との遭遇... 磯原 広  
(春) 善野の概略と磯原家の経緯
2. 13歳の金曜日... 高橋正義 (だれだっけ?)  
(初夏) 清をさそって、はざまの森へ
3. たがために金はある(?)... はざまく二郎  
(梅雨) しめはりの楠木と宅地造成
4. 誰夢明日 (たれぞあすをゆめみし)  
(夏) あきらめねーぞー、と、古文献の検索。

稲架幕 (はさまく)

間 (はさま)

会田 (あいだ)

竹中

栄田  
杉谷  
高槻

やんとり  
やんくりがんぐ

たれぞあすをゆめみん  
あるはずのないまち

...善野（おおの）...

あすをゆめみん

『ありえるたうん』

少年小説？

ぜんぶ一人称。話者は

三人称。視点はリレー形式。主人公は“おおの”。

「奇想小説」

◎“たれむあす”という異界への入り口を守り、  
独自の始祖伝承をたもつ古い町、善野。

◎八家をうらぎり、開発の手を入れようとする、杉谷。  
新線開発に揺れながらも、特異な伝達系統は崩れない。

◎かぞえの14、神数（かんぞ）の2の年に善野の奥儀を伝えるという八家のしきたり  
りで、同学年の年子の兄に遅れをとるのが許せない悪ガキどもの謎ときが、はじま  
った...(やんとりかんく)

◎父親の行状により「やんとりかんく」からはずされた杉谷好一も、  
単独で推理を展開。10月10日の前日、あるはずのないまちを見た。



『ありえる・たうん』(シリーズ) (2006年)

<http://76519.diarynote.jp/200604270113350000/>

2006年4月27日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=243](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=243) <http://76519.diarynote.jp/200604270113350000/>

『暗黒童話』(仮)と同時代に進行しつつ螺旋の形で対をなす、とある田舎の町の、ごく平凡? な中学生とか高校生とか大学生とか教師とか保護者とか町内会のオヤジ連とか通りすがりの観光旅行者とか伝統神事の撮影に来たTV局スタッフとか自然保護区の山にドテ穴あけて高速道路で一儲けを企む土建屋集団とかそれにタカル議員集団とか立ち上がる一般市民の皆さんとかとか.....による、

地元の昔話とか自然風物とか、  
伝統食物とかスローフードとか、  
環境保護とかNPOとかを扱った、

ひたすら明るい話。d(^\*^)

登場人物の半数ぐらいが明暗両方のシリーズに出没しているくせして、「表の世界」では、全然違うカオをしてたりする話.....。

(◇;)

ちなみに。

「ありえる」は漢字だと「有り・得る」ですが、  
「ARIEL」とつづれば「空気の精霊」だし、  
「Ali El」とつづれば「精霊の都市」とか、  
「神に選ばれた者」=「イスラエル」だったり.....☆

おひまなかたは、旧約聖書の黙示録なんかを検索してみたりすると、実わやっぱり暗〜  
い話.....★(=\* =)(=\_=).....の伏線（サイドストーリー）なんだということが、  
ご理解頂ける.....話。(◇;)"

( ??? 図) (時期不明)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません (<https://attachment.outlook.office.net/owa/ma-sako@live.jp/service.svc/s/GetAttachmentThumbnail?id=AQMkADAwATNiZmYAZC05NDI2LWQ5MDItMDACLTAwCgB-GAAADqHlVg%2BmLvkG%2Boi291BXmIwcAETr7nfn7QEu1bbdeAxw4nwAAAgE-MAAAAETr7nfn7QEu1bbdeAxw4nwAAP8eu2QAAAABEgAQAMmK%2BLlpc-QdKrVd%2FwfdFsmE%3D&thumbnailType=2&X-OWA-CANARY=HQFkXm-mXO0akNcXIIdtTGoAD10fX4tMYL0mXe8MXX-VSUS-AHyYsNUuFwj6zHAvV-xuFc0AW4p4.&token=6142c0b9-1c2d-4846-9c4e-44aad9463ae9&owa=outlook.live.com&zisc=1>)

(草稿 · 没原稿)



(いつものように学校へ出かけたはずの清が) (@派遣先の裏紙 / JT 長岡分岐~RT 長岡 w)

<http://76519.diarynote.jp/200609070812180000/>

2006年8月31日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

いつものように学校へ出かけたはずの清が2時間も路上でうずくまっていたと、近所のおばさんにつれられて帰ってきた。

ぐしゃぐしゃに泣いたあとがあって、けれど理由は言わない。

放課後、心配してとんできた担任と母にむかって「もう限界」という言葉で、おとなしくて感受性の強い小学校4年生は、自分の状態を説明したそう。

「学校へ行きたいし、行かなくちゃいけないと思うけど、もうどうしても行かれない」と。

そうして、からだはやっと丈夫になって、ようやく普通の子と同じ暮らしができるか.....と思われていた清の、こんどは「登校拒否」との闘病生活が、はじまってしまったのだ。

(☆清クンの1歳半ぐらいと11歳ぐらいのイラストと、ユミちゃん(清のGF)12歳ぐらいのイラストと、好(ユミちゃんの兄で清の親友?)イラストも、シャーペン描きで、あるのですが、

お見せできないのが.....以下略 w)

セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません([https://attachment.outlook.office.net/owa/ma-sako@live.jp/service.svc/s/GetAttachmentThumbnail?id=AQMkADAwATNiZmYAZC05NDI2LWQ5MDItMDACOWA-CANARY=xCseM\\_\\_Pa0CStwPPIDmBW2CVHDjT4tMY5a8E16cMEO72HNkNpuywxu6cdDbZ2llRhFeU973f-4497-b444-884be90c4524&owa=outlook.live.com&isc=1](https://attachment.outlook.office.net/owa/ma-sako@live.jp/service.svc/s/GetAttachmentThumbnail?id=AQMkADAwATNiZmYAZC05NDI2LWQ5MDItMDACOWA-CANARY=xCseM__Pa0CStwPPIDmBW2CVHDjT4tMY5a8E16cMEO72HNkNpuywxu6cdDbZ2llRhFeU973f-4497-b444-884be90c4524&owa=outlook.live.com&isc=1))

> セキュリティ上、画像はパブーに登録してあるものしか使えません ([https://attachment.outlook.office.net/owa/ma-sako@live.jp/service.svc/s/GetAttachmentThumbnail?id=AQMkADAwATNiZmYAZC05NDI2LWQ5MDItMDACLTAwCgB-GAAADqHlVg%2BmLvkG%2Boi291BXmIwcAETr7nfn7QEu1bbdeAxw4nwAAAgE-MAAAAETr7nfn7QEu1bbdeAxw4nwAAAP8eu2IAAAAABEgAQAF6XG%2B2bql-hBo6enAMXonDpz&thumbnailType=2&X-OWA-CANARY=Th\\_1LDNIbU2WcR1bR\\_41SzDjv9vT4tMYzi8yupgQP7\\_DJsPdJ8fixNyp8LM1KoBcpukpFV08.&token=6f3ab550-2811-41c3-8c67-eff528f92&owa=outlook.live.com&isc=1](https://attachment.outlook.office.net/owa/ma-sako@live.jp/service.svc/s/GetAttachmentThumbnail?id=AQMkADAwATNiZmYAZC05NDI2LWQ5MDItMDACLTAwCgB-GAAADqHlVg%2BmLvkG%2Boi291BXmIwcAETr7nfn7QEu1bbdeAxw4nwAAAgE-MAAAAETr7nfn7QEu1bbdeAxw4nwAAAP8eu2IAAAAABEgAQAF6XG%2B2bql-hBo6enAMXonDpz&thumbnailType=2&X-OWA-CANARY=Th_1LDNIbU2WcR1bR_41SzDjv9vT4tMYzi8yupgQP7_DJsPdJ8fixNyp8LM1KoBcpukpFV08.&token=6f3ab550-2811-41c3-8c67-eff528f92&owa=outlook.live.com&isc=1))

- > 狷介
- > 剣呑
- > 喧嘩
- > 嫌悪
- > 険悪
- >
- > 好が動く理由。
- > only ユミ、キヨ、会田さん、あとエイミ。
- > 父親だとシチュエーションによっては動かない
- > 母親ならかなり無条件。
- > ユミちゃんは好に守られてるのを知っているから
- > 無理なことはしないが、
- > キヨくんは自覚がないので
- > おかまいなし、
- > 会田さんは苦笑い。

「それじゃ、お願いね！」 (時期不詳)

<http://76519.diarynote.jp/200608300046540000/>

2006年8月30日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

「それじゃ、お願いね！」

洗いものを片づけた手ですばやく頭巾とエプロンをはずし、玄関のわきで姿見をあらためながら彼女は云った。

五人もの子供を育てたとはとても思えない若々しい細身で、ながい指が器用に、腰まである金褐色の巻き毛をくるくると編み込みにしていく。

ココアクリーム色の肌。……母は、異国の女性（ひと）だ。

「all right。そっちも頑張って」

自家製ライ麦パンを消化しながら手をふると、飛び出していく寸前に、くるりとふりむいた。

「もちろんよ！」

笑う。彼女は今日から出勤だ。子育ての終わったこの時期に、適職が見つかって嬉しくないはずがない。

-----  
「さて、と……」

いつも通り、きっちり清潔に片付けられた窓の広い台所をみまわし、おれは自分の皿をシンクの洗いおけに沈めた。

> 父はとうに出掛けたあとである。

> 問題が、あとひとり残っていた。

- > どこまで外国問題>現代日本のふつーの感覚に準じる。
- > 「大野の特徴」入れるの? > (のどかで人なつこい地方都市)

○ 暮らしていくことの幸福の証明。

- > ○ ママ・マリ出掛ける。
- > ○ 台所
- > ○ 引っ越し
- > ○ 父はどうに出掛けた
- > ○ あとひとり問題が
- >
- > ○うちの兄弟全員がおれを含めて重度のマザコンなのは
- > ママ・マリが本当にすごい女性なのだから仕方がない
- > として、それにしても末っ子の清は.....

(濃い色のくせ毛が布団からはみだしている。) (たぶん専門学校)

<http://85358.diarynote.jp/201609212047288772/>

2016年9月21日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

- > 濃い色のくせ毛が布団からはみだしている。
- >
- > 子供がひとり、寝ていた。
- >
- > いや、ぼんやりとだが、目覚めてはいるらしい。
- >
- > ながいまつ毛にふちどられた褐色の瞳には、枕もとの窓ごしに、けふるような春先の蒼空と、まだ二分咲きの白い山桜の梢が映じて、ちらちらと揺れている。
- >
- > この町は、いままで住んでいた横浜のはずれより、寒い。
- >
- > 早ければ卒業式には花吹雪の散りはじめる関東の海港都市とは違って、標高のたかいこの山里では、入学式も終わったこれからが、いよいよの花見シーズンなのだ。
- >
- > 「清（きよし）。」
- >
- > すえの弟の枕元を、広はそっとたたいた。
- >
- > いくどか瞬いて、やっと焦点の合ってくる、その表情を探る。
- >
- > 今日は、具合が良いようだ。
- >
- > 「時間、わかってるか？ 起きるか？」
- >
- > さし出された時計の針をぼんやりと眺めて、歳より幼く見える少年は、困ったように、うんとうなずいた。

- >
- > 「がっこー、行く…」
- >
- >
- >
- > そのひとことを聞くためだけにでも、すべてを犠牲にして引っ越して来てよかったのだと、思う。
- >
- >
- >
- >
- >
- > 水恋…SUI REN…
- >
- > 風呼 …HU CHOU…
- >
- > 月吐 …GETSU TO…
- >
- > 緑深 …RYOKU SIN…
- >
- >
- >
- > 祖父挿話

(この話を書いたのは、正確には) (1991.03.06.(水)～  
03.10(日))

<http://76519.diarynote.jp/200609050559340000/>

2006年8月31日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

まえがき by 磯原 広

(解説 by 広の友人)

この話を書いたのは、正確には僕のいちばん下のおとうとの清なのだけれど、まあ誤字脱字のあらしの一人称手紙文を構成しなおしてワープロで打ったのは僕だし、大学のサークル誌に中坊の作文が載るのも妙な具合だし、弟にはあらかじめ話をつけて、夏休みのプール3回・昼食とアイス付き、という条件で著作権はぶんどってあるので、とりあえず僕のノルマ分としてページを埋めるのを許してほしいと思う。

弟から毎日のように送ってくる日記がわりの手紙の内容の、本題にはいるまえに少しぼくら兄弟のことを説明しなくちゃいけない。

広(ひろし)という名の僕をかしらに高(たかし)・透(とおる)・厚(あつし)と続いて、しんがり清(きよし)という男ばかりの五人。母は異国から嫁いできた女性(ひと)で、チョコレート色の濃い肌に、ほりの深い顔、大きな目、くるくるに渦まいている目に褪せた金褐色の髪。(彼女自身、ずいぶんいろんな血がまざっている)。ゆえに、僕たちは、みんなそろって世間一般の日本人とはちょっと違った外見をしている。

古今を問わず、「まわりと違う子供」というのは、えてして仲間はずれというか、イジメの対象にされてしまいやすいわけで、僕らもごたぶんにもれない例だったけれど、幸か不幸か並よりはちょっといい頭と運動神経と、負けん気の強さは兄弟共通で、五人中、僕

をふくめて三人までは、たしょう腕っぷしが強くなりすぎたという以外、なんの問題もなく素直に（自分で書くのもナンだが）、フツーに育った。

（のこる五分の二のうち、まんなかっ子の透（とおる）に関しては、こいつには「まわりの日本人とちがう」うえに他の兄弟とも逆の、むしろ白人系の外見をした「血のつながらないもらいっ子」というハンデがつくもので、ひとなつこい見てくれのわりには、性格に三回転半くらいのひねり技がはいってしまった。こいつと高のハナシというのもぜひ書きたくてノートにネタはたまっているのだが、公表するのはまずいかしれないし、本人達もいやがるしするので、ちょっとメドはたっていない。……話が、それだ。）

問題の末っ子、清には、「混血（ハーフ）」の「美少年」（マジで）のうえに「病弱」という、絵に描きたいようなオマケがついた。

ほんの赤ん坊のころから、誰がみても「まあ可愛らしいお嬢さんね」とほめちぎる、ぱっちりした目とくるくるの天パーあたま。客がくれば母親のスカートにかくれる人見知りの気性といい、なにかといえは熱を出して「かかりつけのお医者さま」の往診をお願いする体質といい、……。

ずっと女の子がほしくて息子ばかり五人も持ってしまった母さんが、ついつい一人娘を育てるように手をかけて、かけすぎてしまったのがまずかったか知れない。まして上に四人もけんかの達者な兄がゴロゴロしていれば、蝶よ花よとまではいかないものの、すっかり猫かわいがりのお座敷むすこになってしまう。

三つ四つになる頃には、末っ子は、内べんけいの泣き虫で、負けん気は人一倍強くせして争いごとはてんでダメ。どんなに大事なものを奪られても、おとなしく泣かされて帰ってくる……そこでまた、四人の兄きがぞろぞろ連れだって報復攻撃に出てしまう……という、今かんがえれば逆効果のうえに思いっきり卑怯（僕と末の弟とでは10歳も年がちがう）な、兄弟以外、近所に友だちの少ない、閉じこもりがちな子供に育ってしまった。

そんな清が幼稚園で、ほかの女の子がいじめられてるのを助けようとして、かわりに十二月の薄氷の池のなかへ突き落とされた、というのは、むしろ上出来だとほめるべきだった。結果として半年ちかくも肺炎と喘息で入院してしまった、という点を除けば。

僕ら兄弟の父親は、若い頃かなり高名なカメラマンで、そのおかげで外国で死にかけたときに病院で世話をしてくれた看護婦の母さんと恋におちて連れかえったのだけれど、とにかく当時の写真集の印税とかのおかげで結構財力もあり、上の四人はそろってバス通学の、小・中つづいたミッション系の私立に通った。だからこそ、混血とって、それほど差別にも合わなかったし、まわりもみんな、そこそこに優秀で、余裕のある家庭の子供たちだから、引退した、もと報道家の息子ぐらいのことでは特別視もされない。とうぜん、何かと事情のある末息子もそこのお世話になろうというのが両親の計画では

あったのだけど、肝心の受験日に40度近い高熱で、池に落ちた幼稚園児は集中治療室にいたのだ。それにたぶん、退院しても片道30分の朝のバス通学は体力的に無理でしょうという医師の言葉もあって、清はひとり、歩いて10分の近所の小学校への入学手続きが決まった。

ところで、入院したのが年の瀬で、何度も悪化したせいでいろいろ併発し、退院は梅雨あけどき、通学を許可されたのは七月もなかばになって、夏休みまでの数日間、ためしに、ということだった。

ピッカピカの新一年生がランドセルもしょいなれて、すっかり仲よしのグループも固まり、プールだ花火だとはしゃいでいるところへ、「からだが弱くてみんなとは遊べない」という、ひとみしりの子供が、おずおずと数日まぎれこんでいたところで、しかも男の子というのに、ものすごくかわいい顔だちながら、肌の色濃い、ちがう外見をしているとなれば、遠まきにじろじろと見物されるのが関の山で、とうてい仲間になんか入れてもらえない。しかも、学校になじむ間もなく始まった夏休みのあいだじゅう、プールにも参加できずに家の敷地のなかだけで過した清が二学期の始業式に出た頃には、もの珍しさだけはすでに薄れてしまい、「ああ、そんな子もいたっけね」程度の扱いで……………。からだがほんとうに弱くて週に3日は休む、という末っ子が、それでも熱のない日には律気に時間割をそろえて静かに登校しているので、学校も違って内情のわからない僕たちは、せめて授業に遅れることはないように、と、せっせと交替で勉強をみてやった。これも、愛情から出た逆効果で、進学率の良さで知られる名門私立校の、しかも兄弟同士の暗黙の競争意識で学年での席次を10番と下らずせりあっているような兄貴たちは……自分の感覚でふつうの小学生を、「おちこぼれ」ないよう、教育したのである。

清の持ちかえってくるテストはほとんど100点とか98点だった。たまに間違えて80点などあろうものなら、一生懸命みんなでなぐさめて、どこが解らないのかとことん調べてやって。(公立小の低学年のクラス平均なんて60とればいい方だ、なんて、僕は気付かなかったのだ)。

おもえば当時から、父は、片脚を失ってカメラを手離して以来、自分が私立中学の英語教師として勤めている……早い話がぼくの担任だった……こともあって、そこまでする必要はないんだと、何度も僕たちをいさめていたのだけれど。

自分が高校受験の体勢にはいってカリカリしていた僕は、からだ弱いからといって成績まで悪くなったら可哀相じゃないか、と、ムキになって反論したことがあるのを覚えている。

そんなわけで。

あまり学校に来ず、いてもだれとも遊ばず、まちがっても昼休みのドッチボールに参加したりはしないで、学級文庫のまえでおとなしく本を読んでいるか、あれいないなど気付くと保健室で寝ていたり、ガイコクジンの母親が迎えに来て帰ってしまったあとだったり……そうでなくても「ゼンソクにわるい」とかでホコリのたつお掃除の時間を免除されていて、みんなより早い時間に、いつも消えてしまう。

(だから、このクラスだけ、HRをしてから掃除になるのだ)。

そのくせ、テストの成績はやたらによくしてしょっちゅう先生にほめられ、授業中だけは兄貴たちのお仕込みよろしく積極的に手をあげて、しかもよくあてられる、とく

れば……………。

今となつては、僕は、清をいじめた子たちを責められないとは、思う。

そう。学年があがり、からだのほうは段々と丈夫になるのに反比例して、清はいじめられっ子にされたのだ。それも、へたをして「発作」をおこしたら困る、という程度の知恵は小学校も3年、4年となつてくるとまわるようになるから、殴る蹴るよりもっと陰湿な、「言葉の暴力」というやつでもって。

「ガイジン」

「ちゃいろ」

「キタナイ」

それが、いちばんよく使われた単語だと、あとで書かれたクラスの反省文集で、僕らは知った。

僕らもしょっちゅう、言われた。言われるたびに殴りかえして、とっくみあいでも手を泣かして、とうとう誰も何も言わなくなるまで、喧嘩をしつづけたし、それは言ったほうが悪いとさとしてHRをひらいてくれる、先生たちのサポートの期待できる学校だった。そうでなくても僕ら、うえの四人は全員、頑として、絶対に譲らなかつたと思うが。

清は、ひとことも、だれにもなにも告げ口しなかつたのだ。

本当に、ことが発覚するまで、僕らは、両親も教師も含めて、ただ清を「甘えんぼうの、口数のすくない、内弁慶で、からだの弱い」としか、見ていなかったと思う。

しょっちゅう、何ヶ月も何週間もの入院生活だとか、苦い薬や痛い注射や、今度こそ危ないかというほどの喘息の発作を繰り返しながら、けれど泣き言や、まわりを本気で困らせるようなワガママを、そういえば決して口にしない子だったと、ずいぶん遅くなってしまつてから、はたつと気がついたので。

「ビョーキがうつる」

「死んじゃえ」

「ズルやすみ」

「サボリ魔」

言われ続けて、なお一言も、いいかえそうとはしなかつたという清が、体育の授業に、少しづつ参加していいと許可が出たのは五年の初夏だった。

プールで泳ぐのは喘息にいい、というのは定説だそうだけど、プール開きになる前までの時間がみんなの一番嫌いなマラソンとか体力測定で、そのあいだはひとり教室で涼しげに自習をしていた清が、「楽しい」プールにだけ混ざり、しかも不必要なほど先生にかまわれて、ひとりじめしている、とあつては……………。

夏休みの泊まりがけの臨海教室に、清は始めて参加した。出がけに気のすすまないふう

にしているのを、発作が起こるのを心配しているのかと、僕らは励ましたのだったけれど……。

その時、なにがあったのか詳しいことは知らない。清はけして言わないし、反省文集のなかでも、多くは書かれていない。朝になったら廊下で布団もなく泣き寝入りしていたと、担任が一日早く連れ帰ってきたときにはすでに高熱を発してフラフラで、そのまま夏休みの残りを、また病院で過ごした。

二学期。自家中毒の症状がはじまり、幾度も吐いた。喘息はほとんどよくなっているのに、原因不明の熱が出たりして、学校を休む日が続いた。

本当に病気のあいだは、一度も学校へ行けないのを苦にする様子を見せなかった清が、朝、母が欠席の電話をかける度に泣き笑いの顔をして、ひどく自分を責める風で、ふさぎこみ、落ち込み。

ようやく、何かがおかしいと両親と担任が連絡をとりはじめた頃、

> 大野は、行政上では加賀県の最南端にあたり、地形・交通の便からいえば、長野の北西端になる。

> 市に昇格したのは割合さいきんだが、江戸期には小なりといえど歴とした独立したひとつの藩であり、大政奉還以来も、明治から緑慶の時代に至るまで、

『 ありえる・たうん (没原稿) 』 (@ 1996.08.24.)

<http://76519.diarynote.jp/200609210802230000/>

2006年9月17日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

☆

その話は、戦後まもなくに遡る.....。

過労により脳梗塞で早逝した壮一との跡を継いだ、ここ数十年で飛躍的に事業を拡大し、法すれすれのきわどい商法でもって成り上がった杉谷貿易（株）の代表取締役は、好一の父親である良一だった。

この町の中でも、ひどいスキャンダルを起こしたのは、十年近く前になる。杉谷グループの強引な攻略に負けて買収の憂き目を見た、おなじく八十一家の一員である柴田商事は、しかし当初は、外界の他の会社に吸収合併されるよりは同じ野者の杉谷のほうがと、楽観的に考えていたのである。

柴田は会田の分家に当たり、それだけ主筋の間に近い。

けれど借財の取りたては苛烈を極めるほどで、苛険誅求とさえ称された。

「裏切りもの！」と、この対応は、野者から糾弾されることになる。

時代の流れについて行かれずに酒に依存する傾向の強かった、柴田の当時の若社長であった御曹司は、身代のすべてを奪われると知って逆上のあまり。

猟銃を持って杉谷の留守宅に押し入り、まだ幼い二人の子どもをタテに取って、要求を遠そうとしたのである。

善野という土地の閉鎖性に甘えた行動では、あった。

☆

好一が、覚えているのは深紅。

にんげんが、ぐちゃぐちゃになって壊れてしまった、そのおと。

倒れる、さっきまで生きていたもの。

狂乱の叫びをあげる、その、連れ。

「きー……、きさまぁ……っつ！」

ナイフを持って五歳の子供に突きかかって来る男が。もはや正気だったとも思えない。

再び銃の引き金に指をかけた子供は、妙に冷静に、相手の腹に狙いを定める自分自身を見ていた。

「大人しくしろ」

そのころその家には鍵をかける習慣はなかった。南に面したフランス窓から、覆面をした男たちは、ある日とつぜん押し入って来た。

わずか三歳の妹が泣きじゃくるからと言って壁にぶつかるほどひどく蹴りつけられて。

自分の悪行も大勢から恨みを買っている事も自覚していた杉谷良一の子育ては苛烈を極め、当時五歳に過ぎなかった息子にも、すでにして一通りの護身術や武器類の扱いを教え始めていたほどで。

(もともと良一自身が警護衆の中でも腕利きの戦士であった)。

子供ながらに明確な殺意があったのか、それとも脅してみようというだけの子供らしい無慮な行動だったのか。

「ユミ、目えつぶってろ！」

父親の手入れするのを見慣れていた猟銃(違法改造の散弾銃)を打ち放した好一は、悪質な誘拐犯を自ら撃退した英雄では、あったのだが。

いまだ血まみれで遺体も転がったままの自宅に急を聞いて駆け戻った父親は、妹を守って戦った息子を抱きしめ、よくやったと誉めた。

☆

五歳の子供が殺意を主張したとて外界の法に照らせば罪に問われるはずもない。しかし人の口に戸はたてられず、狭い善野にこれ以上は、住んではいられなくなった。

ちょうど世界市場へ打って出る計画中を進行中だった父親につれられて、アメリカへ渡って行って十年近く音沙汰もなく、旧藩時代の士族の邸宅が集まる住宅地のさなかにあって、杉谷家の本邸は、なかば幽霊屋敷と化していたのだが。

何を考えたのか、昨年の秋にひょっと兄妹二人だけが、市外で雇った住み込みの家政婦を連れて戻って来て住み始めた。

アメリカで敵を作りすぎて家族の安全を慮んばかったのだとも言い、恥知らずにも御々十三齋に参加させようとして送り戻したのだとも言う。

明確な敵意を持つ旧・栄田系の親族と、どう対応したらよいか判断しかねる他の氏族の曖昧な黙殺の中。

わずか三歳で母国から切り離されて日本語さえおぼつかない妹は、しかし本人には全く罪もない事とて、小学校ではぼちぼち受け入れられていると聞く。

問題は、みずからの意志で殺人を犯したと、五歳にして大人に負けず冷静に主張していた兄のほう、その天才が善野の基準で言えば大罪人である良一にうり二つだとささやかれる、好一なのだった。

☆

(栄田は経済優先策で善野の自然を脅かした。軍部への積極的な協力、杉の植林、化学染料による染色工場の建設で、日の代川の汚染)。

やそかみやは感情的なことは各家で判断せよ。このかみやは別の考え方と立場がある。

『 ありえる・たうん (没原稿・2) 』 (@ 1996.08.24.)

<http://76519.diarynote.jp/200609210807370000/>

2006年9月18日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

三、

それらの印刷物になっている資料は、戦前に、強制的な国の徴兵によって戦場で命を落とす者が増えたために、それによって大昔より語り伝えられて来た〈神代秘事〉(かむないひめじ)を継承する者が絶えることを恐れた神事衆(かみごし)……〈八十一家〉の家長たちによる寄り合い……が、“銃後”に残る女性たちを、(それまでの善野では性別に関係なしに、生まれた順序か本人の適性によって、家督を管理する長子衆と、善野を警護する末子衆とに分かれていたのであるが)、姫御衆(秘護衆／ひめごし)として再組織して、秘め事を後の世に託そうとして編纂したものが、基盤になっている。

(それまでは完全に口承であって、さして重要ではない伝統についても、神聖なことに關しては、決して文字に書いてはいけないとされていた)。

『 ありえる・たうん (家政婦のくだり) 』 (@ 1996.08.29.)

<http://76519.diarynote.jp/200609210754420000/>

2006年9月16日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

(さらに言うなら、その妹に日本語の日常会話を教える職務をも兼ねていた高級取りの最初の家政婦を、“気に喰わない”という単純な理由で叩き出したのは好一の責任である。

当初、日本式の台所の使い方がわからなかったユミコは家政婦のあとを付いてまわって、米の研ぎかた・味噌汁のダシの取り方からと教えて貰い、日本製の調理用具はアメリカのより小さくてオモチャのようだから、子供の自分には使いやすいと、喜んでいたが。

女言葉の日本語を話す身近な人間がいなくなったという点を抜きにしても、いくら家事一般が趣味とは言え毎日の食事の支度をやらせているとなると、本人は文句ひとつなくこなしているとは言え、負担は大きいだろう。

とは思うのだが、その後も二人の家政婦を、睨みつけて怖がらせたあげくに、退職させてしまった.....)

『 ☆ ありえる・たうん 第二話 ☆ (没原稿・1) 』  
(@ 1996.08.)

<http://76519.diarynote.jp/200609210812420000/>

2006年9月19日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

☆

善野(おおの)市立第二中学、略して〈二中〉(にちゅう)の沢木民彦(たみひこ)は社会科教諭で、同じ学校の体育科には双子の弟・邦彦(くにひこ)教諭も勤めているために職員室ではもっぱら民彦先生で通っており、元気の良すぎる一部の生徒たちからは最近ほとんどタミちゃん呼ばわりだった。

対する邦彦は同じ顔でもオニヒコ扱いで、とりわけ顧問を務める武道系部員からはひたすら畏怖されて崇拜さえされている。

僕はいまいち貫禄が足りでやいと本人苦笑しながらも、生徒たちに慕われて楽しく天職にいそしむ民彦の毎日だった。

沢木はいちおう善野では最も古いとされる家柄〈八十一家〉(やそかみや)の一員で、本家の名字は〈箕作〉(さわざ)と書く。その血縁(ちながる)の、長男(かみご)である。

放課後の職員室に民彦を、ある日ふらりと訪ねて来たのは善野郷土史資料館のヌシと称して親しまれるゴマ塩あたまの人物で、ほかの用事のついでのように、出された渋茶を飲みほしながら席をたつ最後になって、さらりと本題を伝えていった。

「今年（えな）も（ま）懲（こ）りでやい《御々十三齋》（ごみそみそい）な禁やうでいな、出（い）ゆるやい」

ニヤニヤ笑いの人の悪さは、その昔けっこう悪名高かった沢木の双子も同じわるさをやらかして、当時の〈警護衆〉（しめごし）に厳しくとっちめられた事実を、まだちゃんと覚えているからだろう。

〈掟破り〉（きんやうでい）の出ない年など実はほとんどないぐらい、それは善野の伝統の、血気盛んな子供たちならではの、冒険なのである。

本当のところ、大人たちは毎年の騒ぎを心待ちにして、はては密かに煽ってさえいるという事実を、純真な子供たちは一向に預かり知らない。

今年注意すべき相手は民彦が担任しているクラスの誰それと名前を挙げられて。

最近ようすがおかしいのは薄々気がついていた民彦は、「やっぱりそうやらし？」と、苦笑しながら監視の役目を引き受けた。

☆

その民彦の受け持つ一年三組には、別の意味での問題児が、もう二人ばかりもいるのだが。そのうち一人の名前を杉谷好一という。

入学式にも出席しないばかりか、新学年が始まって以来一度として中学校に顔を出さない生徒の家に、今日も留守番電話のメッセージを入れながら、民彦はぐちぐちとぼやいた。

「なあって俺ばかり……」

貧乏クジが大拳して押し込まれているクラス編成を見た時には、彼は思わず天を仰いだものだ。

毒をもって毒を制すと学年主任は言ったが。

もっとも一学年四クラスのうち、他の担任がたは定年間近で持病持ちの老人と、九月に出産予定の女性、初めて担任を持った新米という取り合わせなんである。

「俺って職員室でイジメに合ってるって思わねえ？」

「どうせ俺が手伝うのが解っているからだろうが」

邦彦は、小テストの採点を手伝ってやりながら、笑いをこらえて応じた。

首都圏の予備校の寮に一年間と大学・大学院、二年ほどの留学も含めて合計十年ほども野外で過ごした沢木の双子の会話は、二人だけの時にはすっかり標準仕様となっていた。

「ほれほれ、さっさと家庭訪問に行って来い」

☆

その少年が夕方になって家に帰って来ると、見知らぬ男が応接間に上がり込んでいた。

「おにいちゃん、オキヤックさあまだ、よお」

どうも自分の影響で男言葉の日本語を覚えてしまいつつあるらしい妹が、タドタドしい発音で苦労して言いながら、お茶の準備をしている。

「……ユミ、オレの居ない間に知らないヤツを家に上げるなど言ったろう！」

警戒心から、つい声を荒げると、

「？ ガッコのセンセだてえ、言ってるよ？」

白い指で紅茶の葉を数えている、その動きを止めて怪訝な顔をした。

「教師だからって子供に手を出さない保証があるか？ レイプでもされたらどうする！」

おいおい……、

アメリカ育ちでかなり悲惨な経験もして来ているとは噂話に又聞きしたが、聖職者とさえ呼ばれる身分でいきなり童女強姦魔にされては割に合わないぞと、肩をすくめる民彦であった。

「ほれ今日は土産つきだ」

ケーキを差し出されてゲーっ。

しかもこの銘柄は確か妹がマズイと言っていたやつで。

「お兄チャンの、お客様よね？」

自分はまじめに学校へ通っている妹は、兄の不登校については別に何も言わないが。

甘いものなど大の苦手と知っている妹に、ニッコリ笑って皿の上のケーキを差し出され。

番茶とはしでもって無理矢理流し込む好一なのであった。

☆

なんでこんな目に合わねばならんのだ！ と父親の陰謀に憤る。

この市にある秘密を捜せと言う。見つけて、なおも日本に興味を持てなければ、帰国するなりどこかへ留学するなり、好きにすれば、良いと。

慣れない日本語の学校で苦勞している妹を見て、早く謎を解いてしまわなければと、内

心の焦りを抱いている彼なのだった。

☆

その時の杉谷の顔を思い返しては笑いを堪えつつ、これは美味しいと定評のある地場産のミルクプリンを購入した民彦は、次いでもう一人の登校拒否児の家へと向かった。

善野学園の代々の外国人講師のために用意されていると言う官舎の一つ、善野の景観の名物でもある古風な洋風建築のそれは、二階建てで、木造・石積み・赤レンガと無秩序な建材でもって増改築を重ねたらしい奇妙な外観で、前庭の木立になかば隠されて、表の砂利道からは隔たっている。

その玄関口に辿り着くと、取り替えたばかりと覚しい新品の青い引き綱に、「御用のあるかたは、この紐を引いて下さい」と、丁寧な手書きの木札が下げられていた。

言われる通りにしてみると、ドアの内側でかなり大きな呼び鈴の鳴る音が、カランコロンと賑々しくも華麗なリズムを奏でる。

『 ☆ ありえる・たうん 第二話 ☆ (没原稿・2) 』  
(@ 1996.08.)

<http://76519.diarynote.jp/200609210824160000/>

2006年9月20日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

☆

旧街道に沿って発達した問町（といまち）商店街のはずれに位置する市立五小の職員室で、ここ数年来「いつもの四人組」と言えば、高橋博文（ひろふみ）と七木千（しちき・せん）、横川勇二に出来良了（できら・りょう）からなる、幼なじみの一団で。

学年ごとの行事はもとより大仕掛けなイタズラ騒ぎのたぐいの時には必ずいつも真ん中において、盛り上げついでに行きすぎないように仕切り役をも果たしてしまうという、たいそう大人うけの良い名物連である。

その子供達がこの春先に、そっくりそのまま二中に進学し。

そろって同じ三組やいと喜んだのも早々に、いつのまにやら五人が増えて、朝な夕なに連れだって歩く姿がひとの耳目に慣れたのは、入学式から十日ほど、卯月も半ばの頃だった。

「磯原君（いそはらあさ）、今日（えい）なカスミ月原（つくばる）な廻（むあ）って帰らあし？」

神経の細いらしい転校生がきょうは誘って貰えないのかと不安げな顔になる前にと、HRが終わると同時にまっさきに呼びに来るのはたいがい面倒見のよい博文である。

清がはじめのうちは一人で通っていた公道沿いは遠まわりのうえに、車が多くて喘息持ちには決して良くないと、最初に気がついて声をかけたのも、彼の功績で。

地元の野者（のもの）でさえ時々迷うという網の目のような善野の小路や細道を、あちなこう、こちなこうやいと教えては、毎日いろいろな場所を散策しながら戻るのが、新入生の所属クラブが決まるまでの短いあいだ、彼らの日課になった。

この四人組、なぜか一人っ子と末っ子ばかりであったので、二回りもからだの小さい異邦人にあれこれ世話を焼いてみせるのが、弟ができたみたいで嬉しかったのである。

本当なら中学二年になっているはずの実は一歳年長だとは、落第坊主もなかなか白状できないでいた。

「……今日（えい）ちょっと体調よくないシ」

はやくも伝染しはじめた怪しげな善野なまりで、清が困って応じると、

「そんなの（なあが）知ってやい。カスミ月原な、内緒う近道なや」

へへんと笑って清のカバンを持ち上げると、勘のよいマイペースな千（せん）がさっさと先頭を切った。

〈内緒う近道〉とて彼らが言う場合、多くは他人さまの庭先の無断通行だと、案内される側が理解したのは数日まえである。

「……まあた生け垣とか、よじ登ったりするのおっ？」

感情が動くとすぐに戻ってしまうカン高い横浜なまりの語尾を、テレビ言葉なやい」と呼んで何だかおかしそうな顔をする四人は、

「今日（えい）はでえやい」、つまり「やらない」と請け合って、ずんずん歩いて行った。

☆

わさりわさりと厚く積もった去年の朽ち葉を踏み散らす。今日の通路は梢の風に金緑の萌芽がひるがえる、雑木林の踏みわけ道だった。

「雑木なでい、母な木（ぼなぎ）な呼びやらあー」

ひと抱えもある銀灰色の幹がすっきり並んでいたかと思うと、その向こうには折れそうに細い彦ばえに、のしかかるような大枝の夕焼け色のゴツゴツした樹皮の松がある。

清には樹木の種類はあまり見分けがつかないが、地元民の得々とした蘊蓄（うんちく）に耳を傾けてみれば春の蝶から夏のセミ、秋にはアケビやキノコも穫れる、とても豊かな土地らしい。

住宅街から少し離れた深い木立ちの日溜まりに、いくらかの苔に覆われて素朴な句碑が配されていた。

> はるやよい

> かすみつくばるごぼうやま

〈カスミ月原（つくばる）〉というのは地図にある正式な名前でなし、そこを遊び場にす  
る代々の子供たちによる縄張りわけの通称である。

わさび田のあるカスミ沢、山頂ちかくの月神社（つっかんみや）、原山（ばるやま）さん  
ちの牧草地。

この三箇所をまとめて呼ぶからこの名になったというのが博文の講釈だったが、湿気が多い土地なので上に霞がかかる（つくばる）からだど大人達は説明していると、雑学家の千がすかさず混ぜ返す。

そもそもが、呼び名と句碑とはどちらが先に出来たのか？

それを言うなら句碑に書かれた「はるやよい」は標準語(?)の「春は(や)良い」なのか、「春・弥生」か。それとも善野の方言で、

「夏(はる)だ(や)な(あ)よい」という意味なのか.....?

どう思うかと不意に意見を聞かれた清は、

「うーん.....、ワカンナイ」と、苦笑してごまかした。

判らなかったのは議論の是非でなく、早口な善野弁のほうなのでは、あったが。

登記上の区分で言うなら善野市街の南東部を占める〈五芒山〉(ごぼうさん)の、東麓斜面の一带。

なるほどそこを突っ切れれば南麓の谷地水(やちみぞ)あたりの磯原家の新居まで、最短距離の近道である。

(ちなみにゴボウ山という音を聞いてしばらくの間、清はそこでは根菜の牛蒡(ごぼう)が採れるのだとばかり、てっきり思いこんでいたものだ。正しくは、神社を祀った山頂を中心に、上から見ると五筋の低い尾根が星の形に広がっている所から、この名があるらしい。)

「晴(はる)な続かんでら、沼(ぬま)らって通(たあ)らでやい」

善野の子供相撲の連勝横綱だという出来良(できら)はふっくらした指をまるめて足元

を指さした。

日陰の沢地は雪解けが遅いので、春も深まるまでは湿気が残って足場が悪いのだ。

教えられて靴の先でかきまわして見ると、なるほど乾いた落ち葉が占めるのは、ほんの地表の数センチばかり、そのまた下にはしくしくと水気を含んで黒錆びた、重たげな腐葉土層が積み重なっている。

ここで転ぶと実に悲惨な汚れかたをするんだと、自宅からは反対方向になる“近道”に喜々としてつきあっているノリのよい勇二は、自分の失敗談を身ぶり手振りで熱演し、清を爆笑させた。

油を含んだ朽ち葉の底はなかば泥炭と化していて、肌に染みたら容易なことでは色も臭いも落ちないものらしい。

たいして昇って来たとも思っていなかったが、林を抜けると一望のもとに視界が広がって、清は歓声をあげた。

三月なかばに梅が開くここでは、四月も下旬にかかろうかという今が桜のさかりである。

善野盆地の外輪をかこむ山々からも残雪の消えたころ、銀鼠ににぶく輝く木々の樹冠のうへは日々刻々と微細な彩りを増し。

河原の土手に植樹されたソメイヨシノとはまた違う、ひときわ白い山桜のほの明かりも、裾模様のあちらこちらに散見されている。

鳥が梢で高く鳴き、一陣の春風がなまめいた花の香りを抱き込んで、かすかに渡って行った。

☆

カスミ沢というのはその名の通り、流れが速いために気泡を含んで濁ってさえ見えるが、本当は、ごく清冽な湧き水をたたえた、幅は一．五 m ほどの冷たく鋭い溪流である。

道とも言えない落葉樹林の踏み敷きあとを抜けて、いきなり見晴らしの開けるあたりは川べりの草地になっている。

大人の腕ほどの丸太を三本並べて樹皮ごと縄でくくっただけの、簡素な橋がかけてある。

「……転（てん）でえやあ？」

二人並んでは通れないそれに心配症の博文から危惧の声が上がったが、苔と水しぶきで滑りやすい幅狭なそれを、しかし平衡感覚は悪くはない清は、難なく乗りこえた。

橋から下には丸石積みで列を仕切って流水を整えた場所があって、ワサビ田を見るのも初めてな都会っ子はしばらくあれこれ尋ねる。

橋から上に広がる斜（ずり）面は原山（ばるやま）さんちの牧草地。

古くは農耕や運搬に使う小型馬（おおしいま）を代々産していたそうだが、機械の普及に流されて畜牛業に転換し、今では市内最大の乳牛牧場である。

まだ春が浅いので牛は畜舎で飼料をはんでいる。

谷地（やち）口にある青い屋根の加工場で自家殺菌したミルクは近隣の学校給食に卸すほか、問町商店街の一部の店でだけ、その日のうちに買うことが出来ると言う。

家業の高橋豆腐店で、これはミルクプリンを製造する手伝い（もっばら味見）をしている博文がつい宣伝を始めると、今度ゼットイ買いに行くからと、清は目を輝かせて約束したものだった。

☆

見慣れぬ自然の風景に、編入生があまりはしゃいで興味を示すので、ついでだから少し回り道して月神宮（つかんみや）にも詣で、山頂からの善野の眺めも見せてやろうじゃないかという、純粋な好意から出た四人の提案は、しかし裏目になった。

ゆるやかではあるがけっこう長いダラダラの登り坂……。しかも木の根が多くて足場が悪い……。の中腹三分の一あたり。

もともと新学期が始まって以来の緊張と疲労がたまって体調が悪かった（しかもそれを顔に出さないよう我慢していた）清は、とうとう貧血を起こして、倒れてしまったのである。

慌てふためいた四人組は、一番の力持ちである出来良の背中に清を背負わせて、おろおろしながら家まで送って行った。

出迎えた磯原夫人に、「無理をさせてしまってすみません」と、一斉に謝ったのであるが。

夫人は笑ってとりあわず、逆に、迷惑をかけて申し訳なかったと、頭を下げながら、

……こんなのは、いつもの事だから、あまり気にしないで。

軽く告げられた言葉が、逆に四人の心臓に染みこんだ。

幼い頃から野山で育って来た彼らにしてみれば、ただ歩き回っていただけのつもりでも、長期療養のあとで筋肉も脂肪も落ちている清にとっては、十分ハードな遊びで。

毎日それではとても体力がついて来れないと、気がつくと同時に反省することしきり。

.....これからもどうぞ、一緒に遊んでやってちょうだいね？

夫人の言葉にももちろんですと、良い子の返事をし。

天気の良い外遊びの日には清を先に図書館まで送り、夕方また迎えに行って一緒に帰らぁというパターンを定着させたのは、自分もけっこう読書好きな千の発案によるものだった。

.....そんな風にして磯原の末っ子は、仲間たちに大事にされながら善野の暮らしに馴染んで行ったのである.....。

『 ☆ ありえる・たうん 第二話 ☆ (没原稿・3) 』  
(@ 1996.08.)

<http://76519.diarynote.jp/200609210835550000/>

2006年9月21日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

☆

五月のことだった。

クラブ活動が始まって下校の遅くなる出来良と勇二とはしばらく別行動で、千や博文と一緒に本屋や図書館通いの日々。

なまじ外遊びの楽しさに味をしめただけに屋内でおとなしく過ごすのにも飽きてしまって、もう少し、身体を動かしてみても良いかなと、考え始めた頃。

連休のあいまの飛び石の登校日、今日は体調が良いからと言い張ってほんの五分ばかり体育の授業に参加してみた虚弱児は、やっぱり午後から少し熱を出してしまった。

今日は部活が休みだという出来良や勇二ともせっかく久しぶりに一緒に遊べるのにと悔しがり、母が留守にしているのを自宅に帰って一人で寝ているのは心細いとも、言う。

しばらく保健室で清を休ませながらの巨頭会談のあと、一番広い千の家に全員で立ち寄って、釣りでもして時間を使おうじゃないかと、そういう話になった。

千の自宅・七木家の屋敷は五芒山（ごぼうさん）を大回りにする公道そいの巡回バスなら二〇分、清の家をも通り越した反対側の、二中の通学範囲としては一番遠くにあたる、森のきわである。

土地の林業の総元締めとて、総桧づくりの大きな邸宅に、ため息をついて見とれ。

屋敷うちの秘め宮である《無名鬼宮》（ななきみや）の建築様式を見たいと騒ぐ。ねえねえねえのお願い攻撃に負けた千が巫女（みやご）さまに頼んで、滅多に開かれる事のない宮の門扉を、特別に開けて貰った。

ひとしきり感動して騒ぎたてた清は、どうやらその事で最後の体力を無駄に使ってしまったらしい。

砂利敷きの小道を歩いて千の私室のある離れに辿りつくなり、いま客布団を敷いてやるからと声をかけるのも耳に届かない風情で、そこらにあったクッションを枕代わりにくうと寝入ってしまった。

そうなる、暇になるのは残りの四人である。

そばで騒ぐわけにも行かないし、置いていくのも不憫だし。

やがて、しょっちゅう出入りしている出来良のほかの、遠縁にあたる勇二と博文に会いたいと、寝たきりの七木の大媼様から呼びわりの使いがやって来た。

大媼様の説教（くりごと）は、長くなるので有名である。

これは当分帰って来ないなと見当をつけた千と出来良は、ちょうどよい機会とばかりにかねて懸案の内緒の相談を始めた。

雑然と積み上げられた本棚のほかには意外に片づいた千の部屋。

地図や資料を引っ張り出して、ああでもない、こうでもない。

ときどき見やると清は寝返りを打ちつつ幸せそうな顔で。

やがて、二人の足音とにぎやかなブータレが聞こえてきて、慌てて散らかしていた資料を机の下に押し込んだ。

☆

「.....ねえねえ、ゴミ削（そ）ぎ削（そ）ぎの金曜デイって、なあに？」

いきなり上がったとんでもないセリフにぎょっとして見やれば、大人しく熟睡している  
とばかり思っていた清が寝ぼけまなこをこすりつつ、もそもそと起きあがってくるところだった。

「ゴミ、そぎそぎ.....？」

聞き慣れない発音に博文が一瞬理解をしかねると、

「あのね、出来良がね、えーっとね、」

寝起きのすこしかすれた声で、舌たらずに説明しようとする清に、

「.....駄目（でい）だ（や）あっ.....！」

黙らせようと派手に叫んだのが出来良、往生きわよく頭をかかえこんで博文の攻撃範囲からいち早く逃げ出したのは、千のほうであった。

回転数のはやい頭でもって一瞬後には隠されていた話題を理解したクラス委員は、

「お前（あれ）らー！ 神妙（おんな）しい出削（いそ）ぎすでいやらんやっ？」

「しかも外来（そとくう）の清にその話を聞かせただあ？」

どかんとばかりに出来良の頭上に通学カバンを投げつけた。

「誤解だっ、寝てると思ってたんだっ！」

怒鳴りかえした出来良がプロレスわざで応戦して、あとはもう泥沼。状況はよく判っていない勇二がとりあえずと手近のウチワを手にとって、(プロレスなのに) 行司のまねごとを始めた。

〈御々十三齋〉は事実上の善野の成人式である。と、いうのに、この二人の子供である事といたら.....。

自分の事は完全に柵に上げておいて千は一人でため息をついた。

清もそうだが、本人はここで生まれ育ったとは言え、父親の代にここへ移って来た横川クリーニング店の一人息子である勇二も善野式の分類法では〈外来〉のうちである。

その二人の見ている所で安易に口にする奴らがあるかい。

.....ここまで騒がなかったら胡麻化しようもあったのに.....。

☆

《御々十三齋》(ごみそみそぎ)は善野でも特に大事なしきたりの一つで、毎年冬から秋にかけて行われ、〈八十一家〉(やそかみや)に属する旧家の子供たちは男女を問わず、善野式の数え年で十三歳になれば、必ず参加する習わしだ。

初めの数度はいわゆる座学というやつで、〈八十一家〉を束ねる〈九上家〉(このかみや)の長老たちから口伝を聞かされて、どのぐらい内容を覚えられたか試験までされるといふ、けっこう責め苦な行事なのでもあった。

問題は、それが近年では毎月一回、日曜日の昼間にやるというところであって。

戦国や江戸の昔はいざ知らず、今の善野には外界(そと)とのつきあいだってある。とくに困るのは部活に燃えている者が、対外的な試合の日程と重なってしまった場合だ。

泣くなく出場を諦める穏健派もいれば、《御々十三齋》から脱走する悪童もあり。

どちらにしても悲喜こもごもなその選択の結果については、いまだ十三歳に至らない子供たちには尾ひれ背びれの恐怖をはやし、漠然とした噂が流布されている。

そして。

さぼった結果の罰則について、どうしても承伏が出来ないという者たちは。

毎年のように、やってはいけないカンニング、《御々十三齋》の掟破り（きんやうでい）の徒が、出現したわけだ……。

七木 千（しちき・せん）は正月早々にラジコン飛行機の全国大会で、惜しくも優勝は逃したが少年の部の銀賞を取り、よって〈齋〉（そぎ）の日のそれも大事な第一回を堂々とサボタージュしたわけで、来年の一歳遅れの組に落第と、大人達の意見は簡単にまとまった。

これは幼なじみ同士の競争意識がつよい善野においては本来かなり不名誉なはずの処分なのだが、もともと千はいたってマイペースな性格で、文句もなく淡々と従うつもりでいたので彼については大事はなかった。

（場合によっては来年の〈齋〉でさえラジコン大会の前には優先順位が負けるのではないかという、伝統行事に対して今どきの子供が示すクールさについての、一部の大人達の苦笑まじりの危惧なら、もちろんあったのだが）。

問題は、この六月に一年生ながら相撲部の県大会へと出場を決め、例年のように優秀な戦績を納めて来た、出来良（できら）家の名物末子（しめご）の、了（りょう）だ。

負けず嫌いの彼のこと、小学時代以来の県下他市のライバルから「出場も出来なかったのか」と嘲笑されるよりはと彼なりに深刻に悩んだすえに敢えて〈齋〉の日を捨てたはいいが、結果、何人もいる同い歳の従兄弟や従姉妹たちからは、「やっし落第坊主な！」

と、さんざんに擲揄（やゆ）される仕儀となった。

千は出来良のまきぞえを喰ったのである。

☆

「つまりは、宝探しの謎とき的一种だと思え」

善野のしきたりを始めから全部説明しようとして余計に話をややこしくした博文と出来良と、要領を得ない物語にますます頭が混乱して来たらしい勇二と清の顔を見て、内心で頭をかかえた千はようやく、まあまあとばかりに話に割って入った。

「自分で探しちゃいけないと言われているけれど、大人にバレて怒られる前に、答を見つけてしまえば、こっちの勝ちだ」

意外なところに転がっていた「宝探し」の大冒険ネタに、わくわくっと大きな目を輝かせて身を乗り出したのは清である。

なにしろ長期入院中の退屈は、その手の本ですべて埋めていたという、欲求不満の持ち主だ。

「無理に参加しないほうがいいぞ。」

外来者が十三の歳にごみそみそぎに参加できるかどうかは、毎年の秋にやそかみやの長老たちの会議で決まるのであるが。

秋生まれの清や勇二には、まだそのチャンスがあるかも知れない。

いま自分たちの騒ぎに便乗してその資格を失うことになったら逆に損だろう。

千が落ちついて説得に当たるが、清は参加資格の計算方法を聞いて、少し困った顔になり、下を向いてウフンと笑った。

「でも俺、行けるかどうか解らないのに、一年も我慢できないなあー？」

一瞬の表情にまわりが違和感をうけとる暇もなく、好奇心むきだしの顔で参加を申し立てられては、断れたものではない。

結局、博文も勇二もひきずられてしまい、総員がかりの〈内緒う事〉となったわけである。

☆

たまたま相撲部前の廊下でくりひろげられた壮絶な親戚ゲンカを、止めに入りもせずに見聞した後で。

あれは絶対に切れるやらいと、生徒たちからは強面（こわもて）と恐れられているが実はたいそうな笑い上戸でおもしろがりやの邦彦は、大きな手のひらで自分のアゴをしっかり押さえつけながら、グフグフ楽しそうに報告に来たのである。

相撲部室前の壮絶な親族ゲンカを見聞きして、民彦に報告していた邦彦は、やっぱり切れると思っていたぜと、実は笑い上戸の顎を必死で引き締めて、どうやら磯原や横川までまきこんでしまったようだと言った報告の続きを届けた。

邦彦は担任もってないので比較的ひま。

シメゴシの組織は善野中にあるので、連絡を待っているだけでも結構情報は入る。

出来良のなれない読書。

清が意外に詳しい。

外来の清に善野を案内するという名目で、いたる所に顔を出せるというのは意外な効能だった。

「案内してるんでーす」

「そうかあ、がんばってなあ」

見え透いた言い訳に陰で笑いを囁み殺す沢木の双子であった。

☆

じいーわあー……、じいー……、

わあー……

気の早いセミたちが梅雨のなかぞらの蒸し暑さを盛りたてている。

裏山に繁る夏木立のうえ、蒼天に雲の流れるさまを、二階の窓際にひっくり返って見るともなく目を開けて、ごろごろしていた清は、

「こーあーらあーっ」

表の道から遠慮なく呼ばわる声に、ぴよんとはね起きた。

「コアラじゃないわいっ」

窓から乗り出して叫ぶなり、いま行くとも言わずに身をひるがえして階段をかけ降りる。

越してきて三月あまりであきれるほど元気になったと家族の目を細めさせている清は、裏庭で洗濯物を干していた母に、

「かぁさーん、出かけて来るっ」

短く告げながら冷蔵庫から手作り弁当を取り出して、たったと玄関へ向かった。

こここのところ一年三組ではカタカナ名前が流行している。

例えば名字が高橋だったら単純しごくに〈タカハッシー〉とか、出来良はなぜだか〈デキラー総統〉だとか。

くだらないモジリを入れては面白がって、呼びあっていたのだが。

清の姓の〈磯原〉は、早口の善野なまりで発音すればイとHの音が抜けて〈ソアラ〉になるが、これは野者の方言では、〈外荒〉（そとあら）つまりヨソモノで、野蛮人とかの意味もある。

気が強いわりには繊細な神経をしている転校生のアダ名としては使えないぞと、しばらく協議の結果。

さらに子音を入れ換えて、とある南方産の草食動物と同じ名前で呼ぼうじゃないかなと、最初に思いついたヤツは誰だったのか。

あまりにぴったりだと喝采を浴び、あっと言う間にクラスに広まって、今では職員室への呼びだしにさえ使われているような普及度である。

茶色い肌と黒い眼の女顔で、「かわいい」と評されてしまう外見の相似は、まだおくとして。

しょちゅう貧血を起こしては“おんぶおばけ”と化して保健室に運ばれているイメージまでもが含まれているのは言うまでもなく。

ちょっとばかりは屈辱を感じてもいる、清なのだが。

「来（らい）た来（らい）た」

「遅やい、コアラあ」

「だから俺さまはコアラじゃないぞ〜っ」

すでにして抗議するのは本人ばかりなり。

それだって本気でいやがっているわけではないのは見ていれば解るので、もはや周囲は笑って取り合わない。

ガチャンと自転車の脚を蹴り飛ばし、一向は北へと向かった。

☆

……〈謎が辻〉探検隊。

今日の目的地はそういう事だった。

善野盆地の市街の北方には、戦後しばらくの開発ブームにも関わらず手つかずで残された、みごとに何も無い荒野が広がっている。

戦前には軍馬として徴用される運命の小型馬の放牧地だったが、耕作地として開墾がされていないのも、その故である。

野生化した馬が何頭か、群れを作って暮らしているとも言うが、確認はされていない。

〈原場〉（はるばる）と呼ばれるそこは根雪も凍る厳冬期には、模擬合戦から犬ソリから、ありとあらゆる遊びの場になるが、

梅雨あけも間近となれば子供の背丈を軽く越す、カヤやヨモギやホウキ草、育ち過ぎで熱帯雨林のミニチュア状態と化した草の原は多彩な植生で埋め尽くされていて、とても子供の身長では、踏み込めた土地ではない。

そのくせ何十年も放置されているくせに、なぜか背の高くなる樹木の類は育たない。

たまに彦ばえが芽ぶいているのが原野のふちから望見されたとしても、それが三 m ほどにも育つ頃には冬の雪やら秋の大風やらで、必ずと言っていいほど倒れてしまうのである。

地層が浅くて根が張れないのだという、大人の説明がつけられてはいるが。

あえて探検に乗りだした子供らが堅い地面を根性で掘り返してみると、草の根がギシギシにからまりあう数十センチの痩せた土壌のその下には、けしてシャベルの歯も立たない謎の金属床が広がっているのだとも、いやいやうっかり掘り抜くと底無しの暗黒穴が口をあけて、不届き者をぽっかり飲み込んだまま知らない顔をするのだとも、ささやかれてはいる。

事実、十何年かに一度は行方不明の子供が搜索される騒ぎになって、そうした子らが発見されると警察に届けの出た事は、かつてない。

☆

善野盆地の中央を流れる日の代川が長い年月の間にも削り残した堅い岩盤を主体とする小高い丘に登り、西に広がる原場を見おろしながら、そうした説明を清が聞いたのは、夏休み早々の晴れた日のことだった。

一向が丘に登ってしばらくすると、地元の媪様が孫のみやごの手をひいて丘の上の小さな社に上がってくる。

たしか〈八十一家〉で見たことのある顔だったと記憶力の良い千が、

「小母（おな）さあ、今日（えい）ま良（ああ）やあ」

きちんと挨拶すると、

「良（ああ）やあー？」

のんびり声をかけ返して、微笑みながら社に向かった。

社の五本柱の真ん中に黄色い旗をてっぺんまで揚げて、何の願かけなのか熱心におろが  
んでいる。

その耳に入るかも知れないと思うと、そこで禁やうでいの話をするわけにも行かないの  
で、場所を変えようということで、

そうした話を聞きながら、縁辺の小高い丘に登って測量のまねごとをしていた清は「あ  
れっ」と気がついた。

「ねえねえ、あれ……」

指さす方向、原場のまんなかを、恐れる風もなく一人で歩き過ぎて行くのは見知った顔  
である。

「でいー、杉谷やい」

「あん所（ばる）なあ、何（みゃあ）やらい？」

一年三組に在籍している更に最大の問題児、入学式からこちら一日たりともまともに出  
席した事がないという、杉谷好一の、大人なみに背の高い姿であるのは望遠鏡でも確か  
めて、間違いはなかった。

事情をほとんど知らない清から見れば、混血のうえに登校拒否をしているという、自分  
とずいぶん似たヤツである。

「もしかして、あいつも〈掟破り〉(きんやうでい) をしてるんじゃない？」

思いついたという顔で、わくわくと眼を光らせて清は言った。

もしそうならば合流して、一緒に探検が出来るじゃないか。

残りの四人……、杉谷が学校へ来ない詳しい事情を知る野者は、それを聞くなり一斉に首を横にふった。

「駄目(でい)！」

叱りつけるように言われて清は目をみはる。

「……なんで？」

「多分あいつは〈村八分〉(そぎのけ) の扱いだと思う」

ちゃんと聞いたわけではない勘だがと、例によって大人たちの会話の断片から推理を組み立てていたらしい千が、それ以上の説明はせずに難しい顔でうなる。

それってイジメの一貫ではと、自分にはこんなに優しいクラスメイト達の意外な言動に、元・登校拒否児がおびえたような困った顔をして黙りこむのを見て、博文は慌てた。

「そんな可愛い性格じゃないぞー」

なにしろ原チャリでさえない二五〇ccのバイクを無免許で公然と乗り回しているヤツである。

清の感覚では横浜あたりの繁華街では、さほど得意な光景でもなかったのだが、ここはのどかな善野である。

本人もこちらを馬鹿にしているのだから。

恐いやつ、悪い噂のあるヤツなんだから。

けっして構いつけたり秘密を打ち明けたりするなど、厳命されて仕方なく、約束はしてみる清である。

孫とおぼしい童女が追いかけて来て、黒キイチゴの早熟の取れる場所を教えてくれた。

丘の上から原場の地形と方位を確かめたあと、四人は日の代川の河原で弁当を使い、上流へと向かった。

社の周囲の高さ 2m ばかりの例の五本柱に、四人の去った方向に黄色い布を半旗に掲げかえる媼の姿があった。

もう一枚、原場の方向へも、半旗をつけて加える。

☆

その杉谷好一は、遠目には無造作に見える歩きかたながら、足元に十分注意を払いながら、(まさか地雷は仕掛けてあるまい)、善野観光パンフレットには申し訳のように名前だけ並べてある「善野九不思議」の一、〈謎が辻〉の在処を求めているのであった。

これだけ格好の遊び場でありながら子ども達からは禁断の領域とされている原場の、さらに東北辺、日の代川上流域にある白鳥天宮の御料林と境を接するあたり。

とだけ記されていた場所を特定する為に、実は先刻まで清たちと同じ丘の上に登って方位を調べていたのは同じ行動だったのだが。

時折り狂ったように震える方位磁石はあてにせず、

黒々と艶を帯びていくらか粗い手触りの表面は、どう見ても金属としか思えないが、上に積もった苔や泥の厚さと、さらにそれがこのところひんぱんに降る酸性雨に冒されている様子もうそではない。

にもかかわらず、まったく赤錆びてもない。

「まさか……隕鉄か？」

インドあたりの謎の遺跡にあるという、けして錆びない金属柱の写真を思い出して、好一は首をかしげた。

書いてある文字は古い自体でこう読める。

> 誰 夢 明 日

「江戸時代初期に建立されたと覚しいこの石碑に記された文字の一つは「誰か明日を夢みん」と読み、残りは今日では判読不明なるも、厳しい山越えをして交易の旅にでる者たちの無事を祈る言葉であるだろう」と。

こんな所まで足を運ぶ物好きな観光客を想定したわけでもあるまいに、ごていねいに解説が記されている。

真新しい（少なくとも立てられてから数年以内の）しゃれたデザインの案内板を見て、いくらか頭痛を覚えた。

誰が何の意図で散りばめている冗談なのかは知らないが、どうも知らずに罠に陥っているような、誰かから監視されている気もして首筋でちりちり警戒警報が鳴っている。

曇りはじめているので太陽で方向を測る手段が使えない。

これまでかとあきらめて東のかた、だいたい日の代川の方へと見当をつけて向かった。

☆

丘のうえにある社の柱に、二枚目の黄色い布が束をむいて掲げられるのを双眼鏡で確認し、市街地方向へ去ったと了解して、民彦はむしろ残念そうに呟いた。

「惜しいっ、まっすぐに北上してりゃー」

監視にまわっているバードウォッチング仕様の民彦と邦彦。

「こう毎週、監視をしてたんじゃデートの暇もありやしない」

「相手（あて）もおらでえ、見栄な張りでやぁー」

わざと善野の言葉を使い、そらっとぼける弟に、ガッシと肘鉄をくれて。

野っばらの真ん中で、いい歳をした三十男二人は、ぼかすかと兄弟げんかを初めたものではあった。

『 ありえる・たうん 3 (没原稿) 』 (@ 1996.08.頃)

<http://76519.diarynote.jp/200609281955170000/>

2006年9月22日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

「せえなや。あいな、流女様（ながるめさあ）やい聞（み）いた事（うら）……、心静（しんしず）るうなや、聞（み）いなや良（あ）あ」  
媼（おな）さまが、静かに言いおいて語りはじめた。

☆

その話は、戦後まもなくに遡る……。

過労により脳梗塞で早逝した壮一との跡を継いだ、

ここ数十年で飛躍的に事業を拡大し、法すれすれのきわどい商法でもって成り上がった杉谷貿易（株）の代表取締役は好一の父親である良一だった。

この町の中でも、ひどいスキャンダルを起こしたのは、十年近く前になる。

杉谷グループの強引な攻略に負けて買収の憂き目を見た、おなじく八十一家の一員である柴田商事は、しかし当初は、外界の他の会社に吸収合併されるよりは同じ野者の杉谷のほうがと、楽観的に考えていたのである。

柴田は会田の分家に当たり、それだけ主筋の間に近い。

けれど借財の取りたては苛烈を極めるほどで、苛険誅求とさえ称された。

「裏切りもの！」と、この対応は、野者から糾弾されることになる。

時代の流れについて行かずに酒に依存する傾向が強かった、栄田の当時の若社長であった御曹司は、身代のすべてを奪われると知って逆上のあまり。

猟銃を持って杉谷の留守宅に押し入り、まだ幼い二人の子どもをタテに取って、要求を遠そうとしたのである。

善野という土地の閉鎖性に甘えた行動では、あった。

☆

「大人しくしろ」

そのころその家には鍵をかける習慣はなかった。南に面したフランス窓から、覆面をした男たちは、ある日とつぜん押し入って来た。

わずか三歳の妹が泣きじゃくるからと言って壁にぶつかるほどひどく蹴りつけられて。

自分の悪行も大勢から恨みを買っている事も自覚していた杉谷良一の子育ては苛烈を極め、当時五歳に過ぎなかった息子にも、すでにして一通りの護身術や武器類の扱いを教え始めていたほどで。

(もともと良一自身が警護衆の中でも腕利きの戦士であった)。

子供ながらに明確な殺意があったのか、それとも脅してみようというだけの子供らしい無思慮な行動だったのか。

「ユミ、目えつぶってろ！」

父親の手入れするのを見慣れていた猟銃（違法改造の散弾銃）を打ち放した好一は、悪質な誘拐犯を自ら撃退した英雄では、あったのだが。

いまだ血まみれで遺体も転がったままの自宅に急を聞いて駆け戻った父親は、妹を守って戦った息子を抱きしめ、よくやったと誉めた。

☆

五歳の子供が殺意を主張したとて外界の法に照らせば罪に問われるはずもない。しかし人の口に戸はたてられず、狭い善野にこれ以上は、住んではいられなくなった。

ちょうど世界市場へ打って出る計画中を進行中だった父親につれられて、アメリカへ渡って行って十年近く音沙汰もなく、旧藩時代の士族の邸宅が集まる住宅地のさなかにあって、杉谷家の本邸は、なかば幽霊屋敷と化していたのだが。

何を考えたのか、昨年の秋にひょっと兄妹二人だけが、市外で雇った住み込みの家政婦を連れて戻って来て住み始めた。

アメリカで敵を作りすぎて家族の安全を慮んばかったのだとも言い、恥知らずにも御々十三齋に参加させようと送り戻したのだとも言う。

明確な敵意を持つ旧・栄田系の親族と、どう対応したらよいか判断しかねる他の氏族の曖昧な黙殺の中。

わずか三歳で母国から切り離されて日本語さえおぼつかない妹は、しかし本人には全く罪もない事とて、小学校ではぼちぼち受け入れられていると聞く。

問題は、みずからの意志で殺人を犯したと、五歳にして大人に負けず冷静に主張していた兄のほう、その天才が善野の基準で言えば大罪人である良一にうり二つだとささやかれる、好一なのだった。

やそかみやは感情的なことは各家で判断せよ。このかみやは別の考え方と立場がある。

『 ありえる・たうん 3 (没原稿) その2 』 (@  
1996.08.頃)

<http://76519.diarynote.jp/200609281959180000/>

2006年9月23日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=3](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=3)

「えな、納得行きません！」

気が立ったのか、ずいと立ち上がり、忍が息まいた。

「柴田の晴樹（はるき）も友達ですが、それとこれとは別です！」

そもそも当の事件の詳細を、そのころ子供であった自分たちは知らされてもいない。何の説明もなく、ただ付き合うのを禁じると言われても……、

かつて家が近くて遊んだ記憶を残している者は、自分と同じ世代には、多い。

せめて納得の行く説明をと締めくくり、非礼を詫びて腰を降ろす。

そうだそうだと、周囲にいた同世代の……警護衆としては最年少である……子供らが、意見を同調させた。

む……、と。

困りこむのは長老衆である。

「青（わか）ん衆（し）な懐柔（てえなず）るま巧（うま）えな、父親と一緒にやあーっ！」

昏い響きのからかいが投げられた。

「……俺らも正確なところは知りません」

その頃ちょうど留学中だった沢木の双子も、言われてみれば噂の積み重ねばかりで、事件を直接知る者からの詳しい話は聞いた事がない。

しかもその噂の中には当時五歳だった好一自身が父の猟銃を使って誘拐犯人を射殺したのだとまで無責任な尾鱈が付いている。

確かに山林に囲まれている善野には猟銃を所持する者も多く猟友会もあり、邦彦とてその会員ではあるが。

わずか五歳の子供の手の届く所に猟を置き、あまつさえその扱いを教える親などいる筈もないし。

仮に万が一うわさのほうが真実だったとしても、それは立派な正当防衛ではないか……。

(後日、「せやからアンタ達を担任に付けたんやもん」と、二中の職員室で、あっさり学年主任は言ったものだったが。)



(借景資料集)



奥付



## 奥付

リステラス星圏史略

古資料ファイル

5-2-1-X

(ありえる・たうん 没原稿)

../../book/109568

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ

../../book/109568

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109568>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

---

リステラス星圏史略 古資料ファイル 5-2-1-X (ありえる・たうん 没原稿)

---

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---